

カフカ作『変身』の翻訳をめぐる

諏訪田 清

次のドイツ文をお読みいただきたい：

Erst in der Abenddämmerung erwachte Gregor aus seinem schweren ohnmachtsähnlichen Schlaf. Er wäre gewiß nicht viel später auch ohne Störung erwacht, denn er fühlte sich genügend ausgeruht und ausgeschlafen, doch schien es ihm, als hätte ihn ein flüchtiger Schritt und ein vorsichtiges Schließen der zum Vorzimmer führenden Tür geweckt.

これはカフカ (Franz Kafka) 作『変身』(Die Verwandlung) の第2章の冒頭である。カフカ全集には (1) プロート版カフカ全集、(2) 批評版カフカ全集、(3) 史的批評版カフカ全集の三種類がある¹。しかし本項が扱う箇所に関しては此の三種類に異同はない。

本稿は此のドイツ文の中で下線を施した非現実話法文をどのように訳すべきかを主たる考察の対象にする。

先ず此の非現実話法文がどのように訳されているかを見ていくことにする。管見するに、邦訳は全部で13刊行されている。下にその訳を発表年順に掲げることしよう：

(1) はや日も暮れようという頃になってやっとグレゴールは氣絶状態に似た重苦しいねむりからふと眼を覺ました。べつにこれということがなくとも、
晩かれ早かれもうそろそろ眼を覺ます時刻であった。というのは十分に休養し、ぐっすり眠ったという氣分だったからである。しかしかすかな聲音と、

¹ 丘沢静也氏の命名に倣った。丘沢静也訳『変身／掟の前で 他2編』光文社古典新訳文庫 163-167 頁 2007年

玄関の間に通ずるドアを用心深く締める音がしたために眼をさまされたような氣もした。

(高橋義孝訳『カフカ全集』第三卷 新潮社 1953年)

(2) 日ぐれがたになってようやく、グレゴールは、気が遠くでもなったような重苦しい眠りから目をさました。別にもう邪魔がはいらなくとも、遠からずきつと目をさましたことだろう。たっぷり休養がとれてよく眠れた気分だったからだが、しかし、彼の眼をさまさせたのは、なにやら逃げだしていく足音と、玄関の小室に通じるドアを用心ぶかく締める音のせいらしかった。

(山下肇訳『変身他一篇』岩波文庫 1958年)

(3) 夕ぐれの薄明りのなかでグレゴールはやっと重苦しい失神したような眠りから目ざめた。きつと、別に妨げがなくともそれほど遅く目ざめるというようなことはなかったろう。というのは、十分に休んだし、眠りたりた感じであった。しかし、すばやい足音と玄関の間に通じるドアを用心深く閉める物音とで目をさまされたように思えるのだった。

(原田義人訳 世界文学大系58『カフカ』筑摩書房 1960年)

(4) 夕暮れになってやっとグレゴールは、重苦しい失神したような眠りから目をさました。別にじゃまがはいらなくても、きつとまもなく目をさましたことだろう。じゅうぶんに休みもしたし、寝足りた氣もしたからだが、それでも何かふとした足音と、控室へ通ずるドアを用心ぶかくしめる物音とで、目をさまされたように思えるのだった。

(辻 理訳 世界の文学39『カフカ』中央公論社 1966年)

(5) 夕方、あたりが暗くなるころはじめてグレゴールは失神状態にも似た昏々とした眠りからさめた。そのままで彼はまもなく眼をさましていたことだろう。よく寝たと見えて疲れは十分に癒えているようだった。しかし軽い、いそがしげな足音と、控えの間に通じるドアをそっとしめる音とで眼がさめたような氣がした。

(高安国世訳 世界文学全集37『カフカ/リルケ』講談社 1967)

(6) やっと夕暮れの薄暗さが迫る頃になって、グレゴールは重苦しい、まる

で気が遠くなっていたような眠りから目ざめた。たとえ邪魔されなくても、彼はそれ以上もう眠っていることはできなかつたろう。満足がいくまで眠りたりて、十分に疲れを休めた感じがしていたからだ。逃げだしていく素早い足音と、玄関の控え室へ通じるドアを用心ぶかく閉める音で自分は目がさめたような気がする。

(中井正文訳『変身』角川文庫 改版 1968年)

(7) 夕暮れになってようやく、グレゴールは、失神状態に似た重苦しいねむりから目ざめた。物音で目が覚めたのだが、べつに眠りを妨げられなくても、これ以上眠っていなかつたろう。十分に休息し、ぐっすり眠った感じだったから。しかしあわただしい足音と、玄関に通じるドアをそっと閉める音で目が覚めたような気がした。

(高本研一訳 ドイツ文学 第一巻『カフカ』三修社 1969年)

(8) 夕暮になってようやく、彼は気を失ったような、重苦しい眠りから醒めた。邪魔がなくても、もうそろそろ目を覚ますときだった。休息も眠りも十分足りた気分だったから。しかし、ふとした足音と、玄関の間に通じるドアを用心深く閉じる音のため、目覚めたような気がした。

(城山良彦訳 世界文学全集74『審判・変身他』集英社 1979年)

(9) グレゴールが失神に近い重い眠りからめざめたのは、もう日も暮れかけてからのことだった。眠りを乱すものがなくても、それより目をさますのがよほど遅くなることはなかつただろう。もう眠るだけ眠り、休むだけ休んだという感じがあった。しかしそれはそれとして、どうやら彼を呼び起したのは、せかせかした足音と、控えの間に通ずるドアをそっとしめる音らしかった。

(川村二郎訳『カフカ全集』第一巻 新潮社 1980年)

(10) 夕暮れのなかで、ようやくグレゴールは、気を失った状態に似た深い眠りから眼を覚した。邪魔がなくても、きっともうそろそろ目醒めるころだつたろう。というのも、たっぷり休みをとって眠りたりた自分をおぼえたからである。しかし、そそくさとした足音や玄関前につながるドアを用心ぶかく閉める音に目をさまされたかのような、そんな気がした。

(三原弟平訳 カフカ『変身』註釈 平凡社 1995年)

(11) 夕方の薄闇のなかで、グレゴールはようやく、失神にも似た重苦しい眠りから眼を覚した。いずれそのうち、おのずと目覚めるはずだった。十分に休んで寝足りた気分だった。ともあれ、せかせかした足音と、控えの間に通じるドアをそっと閉めた音で目が覚めたような気がした。

(池内紀訳 カフカ小説全集4『変身ほか』白水社 2001年)

(12) 黄昏どきになってようやくグレゴールは、失心したかのような重苦しい眠りから目を覚ました。べつに邪魔がはいらずとも、いずれそのうち目を覚ましていただろうが、というのも、たっぷり眠れて十分に休養がとれた気分だったからで、目が覚めたのは、なにやら逃げだしていく足音と、玄関ホールに通じるドアを注意深く閉める音のしわざらしかった。

(山下肇・山下萬里訳『変身・断食芸人』岩波文庫 2004年)

(13) 日が暮れかけてはじめてグレゴールは、失神に似た重い眠りから目覚めた。なにかに起こされなくても、きっとそのうち目覚めていただろう。たっぷり眠り、たっぷり休んだ気分だった。だが、せかせかした足音と、玄関ホールに通じるドアをそうっと閉める音で目を覚ましたらしい。

(丘沢静也訳『変身／掟の前で 他2編』光文社古典新訳文庫 2007年)

考察の対象としている非現実話法文 *Er wäre gewiß nicht viel später auch ohne Störung erwacht* に於いては、(1) から (13) の訳は、前提部の見当たらない (11) の訳を除いてすべて *auch ohne Störung* を前提部としている。果たしてこれは正しいのであろうか。

次に此の非現実話法文の *nicht* は何を否定しているのであろうか。(1) から (13) のすべての訳に於いて *nicht* は *viel* のみを否定すると見なしていると思われる。その結果 *nicht viel* が一つの語のように見なされて *nicht viel später* には「晚かれ早かれ」「遠からず」「まもなく」「もうそろそろ」「いずれそのうち」或いはそれに近い訳 ((1)、(2)、(3)、(4)、(5)、(8)、(9)、(10)、(11)、(12)、(13))、それとも「それ以上～ない」((6)、(7))、このどちらかの訳語が当てられている。果たしてこれは正しい解釈であろうか。

問題点をまとめよう。果たして *Er wäre gewiß nicht viel später auch ohne*

Störung erwachtなる非現実話法文に於いてauch ohne Störungが前提部になることが可能なのであろうか。そしてそのことと不可分の関係にあるが、nichtがvielのみを否定するなどということがこれまた可能であろうか。筆者は此の点に大いなる疑問を抱き、此の拙論を物した次第である。

此の疑問を解明するためのヒントになると思われる、次のドイツ文をご覧ください：

Mit Euch, Herr Doktor, zu spazieren
Ist ehrenvoll und ist Gewinn;
Doch würd' ich nicht allein mich her verlieren,
Weil ich ein Feind von allem Rohen bin.
(Goethe: Faust 941-944)

下線を施したDoch würd' ich nicht allein mich her verlieren (943行) は考察の対象としている『変身』の非現実話法文に非常によく似ている。Doch würd' ich nicht allein mich her verlierenも非現実話法文である。否定詞nichtも現れてくる。『ファウスト』943行はどのように解すべきであろうか。非現実話法文であるからには通例前提部が存在していると考えられる。では前提部は何であろうか。それはalleinであると考えられる。「仮に一人ならば」である。そしてnichtは「仮に一人ならばこんなところに迷い込んでくることを私はしない」という打ち消しの働きをしている。関口存男氏によれば「誤想排除」の機能を担っていることになる²。此の「誤想排除」という考え方を生かせば逐語訳は次のようになろう：

仮に一人であったとしてもこんなところに迷い込んでくるなどとあなたが仮構するとすれば、それは誤想であり排除しなければなりません。

考察の対象としている『変身』の非現実話法文も『ファウスト』943行と同じように解することができないであろうか。Er wäre gewiß nicht viel später auch ohne Störung erwachtに於けるviel späterが此の非現実話法文に於ける前提部の役割を果たしているのではなかろうか。「現実」に反して仮にviel späterと解した

² 関口存男著『冠詞 不定冠詞篇』587頁

ならば」と解することができるのではなからうか。そしてnichtは「現実に対して仮にviel späterとしたら彼はたとえ物音に邪魔されなくても目を覚ます」などと仮構することは誤想であり排除しなければならないという働きをしているのではなからうか。

先ずviel späterに就いて考えてみよう。viel späterは、(11)の訳も含めてすべての訳に於いて例えば次のようなものに解されている：

30 Minuten später

viel späterのvielは此の句例に於ける30 Minutenに当たり、量名詞と見なされている。späterが「あとで、のちに」の意であることは論をまたない。

仮にviel späterがすべての訳者が考えているように「あとで、のちに」の意であると見なしてviel späterを考察の対象としている非現実話法文の前提部に解するとしたら、此の前提部はどのように訳したらよいであろうか。「仮にずいぶんあとになるならば」「仮にずいぶんのちになるならば」とすると、意味は通ずるようでもあるけれどもどこことなくおかしな訳であるように思われる。辞典を調べると「あとで、のちに」の意のspäterは、通例上に挙げたように30 Minuten späterのように使われるようである。つまり「あとで、のちに」の意のspäterはvielといった、単に漠然とした量を表す量名詞とではなくて30 Minutenのような具体的な数と結びつくようである。そしてこのように使われると、späterが「あとで、のちに」という意であることははっきりとわかってくるのではないのだろうか。

考察の対象としているviel späterを非現実話法文の前提部と見なしながらその意がどこなくおかしいのは、非現実話法文の前提部と見なしたことが誤っているのではなくて前提部の意を誤って解釈していることから来ることもあり得るのである。何を誤って解釈しているのであろうか。それはspäterを「あとに、のちに」の意の副詞と解したことから来ているに他なるまい。此のspäterはそのように解するのではなくてspätの比較級と解しなければならないのではなからうか。もし此のspäterをspätの比較級であると見なすことが可能ならば、vielは簡単に説明することができる。vielは比較級を強める働きをしている、そのように捉えることができる。

『変身』の第2章の冒頭は次のように書かれていた：

Erst in der Abenddämmerung erwachte Gregor aus seinem schweren ohnmachtsähnlichen Schlaf.

主人公はようやく夕暮れ時になって、それも失神に似た重苦しい眠りから目を覚ました。このようなことを知らせて読者を驚かせる。読者の中には主人公はどうして夕暮れ時になるまで目を覚ますことができなかつたのであろうかと思う者がいるかも知れない。作家はそれを先回りするかのように、その夕暮れ時よりもずっとずっと遅い時になれば、という場合を仮構してみせる。そして此処で初めて主人公は物音によって目を覚ましたことを読者に知らせる。なかなか手の込んだ手法である。目を覚ました夕暮れ時から僅かにしか時間が経過していない時の場合を仮構すれば、その時には主人公は同じように物音に邪魔されて目を覚ましたであろう、読者はそのように思う恐れがある。目覚めた時よりもずっとずっと遅い時を仮構することが此の際非常に重要なのである。viel späterが非現実話法文の前提部として設定されているのにはこのような背景が存在していると思われる。

次にEr wäre gewiß nicht viel später auch ohne Störung erwachtに於けるnichtに就いて考えることにしよう。nichtは何を誤想排除の対象としているのであろうか。解明の手がかりになるとして挙げたDoch würd' ich nicht allein mich her verlierenを考えてみよう。此の『ファウスト』943行に於いては「仮に私が一人であってもこんなところに迷い込んで来る」と話し相手であるDoktorは考えるかも知れないが、それは誤想であるから排除しなければならないと発言者は云っているのである。そしてその働きをnichtが行っている。『変身』の非現実話法文も同じように解釈することができるであろう。仮に夕暮れ時よりもずっと遅い時になれば主人公は物音に邪魔されなくても自然に目を覚ますであろうと読者は考えるかも知れないが、それはきっとあり得ない誤想であろうから排除しなければならない。nichtはそのことを示していると考えられる。興味深いことに、此の文が非現実話法文として成立し得ているのは出来事の展開に要請されてviel späterを仮構したことにあるのだが、他ならぬその仮構が誤想を招く要因として仮構と同時に排除されているのである。前提部viel späterの直前にnichtが位置しているのは、そのように解釈しなければなるまい。

茲で否定に関する関口氏の解釈を紹介しなければならない。関口氏は次のように述べている³：

たとえば、「私は、いまだ曾て何人にも何一つ迷惑をかけたことはない」といったような文にあっては、分解してみると、排除の対象となる誤想が四つ存在する。第一は、「いずれの時にか」(je, jemals, ただimmerだけは疑問詞と結合したwas immer, wie immer [英: whatever, however] 等の場合以外は不定詞としては用いられない) という、「時」の問題、第二は、「何びとかに」(jemand, einem, wem immer) という、「人」の問題、第三は、「何物かを」、「何事かを」(etwas, was) という、「事物」の問題、最後に第四は、これが最も重要な、「迷惑をかけたことがある」という誤想である。これらの誤想は、本当を云うと、片っ端から、逐一排除されなければならない。だから、全部に否定詞を用い、或いは冠置して: Ich bin niemals keinem Menschen nichts nicht schuldig geworden と表現する方言、通俗辯には、たとえ標準語の伝統からは非難されても、非常な自然さがあるのである。時、人、物、動詞の四つには、いずれを軽しとなすわけにも行かない平等な重要さがある。それを平等に重点を置いて表現もし、かつ発音もするというのは、心理的に当然である。それを、習慣上大抵の場合最先に置かれる時の副詞だけに重点があるかの如くに、それだけを否定形にし、他の三つを全部不定の形(動詞に至っては全然何の否定詞も不定詞も伴わないで!) にして Ich bin niemals einem Menschen etwas schuldig geworden と表現することが習慣になってしまった(これは英仏その他すべてほぼ同じであるが) 標準語こそ、思えば実に奇妙なものであって、ただ伝統に敬意を表してそういうものと受け取っておくの外なき奇習以外の何物でもない。

否定の重点を、否定詞によって示すか、不定詞によって示すかは、単に習慣の問題であって、べつにどちらでなければならないという論理的根拠はない。動詞以外の全部を否定詞で示すドイツ方言も正しいし、全部を不定詞で示す日本語も正しい(私は、曾て、何人にも、何一つ、迷惑をかけたことはない)。ただその両者を混淆せしめる近代西洋語だけは、現象と見て、さしずめ先ず奇習と評しなければならないであろう。

関口氏の解釈を考察の対象としている非現実話法文に当てはめてみよう。此の文は理論的には次のようなものと考えられる：

Er wäre gewiß nicht viel später nicht auch ohne Störung nicht erwacht.

³ 関口存男著『冠詞 不定冠詞篇』595頁

つまり viel späterの直前に位置している nicht によって形としては現れて来てはいないが、実際には nicht auch ohne Störung 及び nicht erwacht となっているのであり、nicht viel späterの nicht は viel späterのみならず auch ohne Störung と erwacht のいずれをも否定することになるのである。考えてみればこれは容易に理解できることなのではあるまいか。viel später と仮構することが誤りならば、その仮構がもたらす結果も当然誤りであると結論づけることは当然至極のことであり、そこには何ら疑問を挟む余地はあるまい。

此処に至って13の翻訳との決定的な相違が浮かびあがってくる。すべての訳は Er wäre nicht viel später auch ohne Störung erwacht に於ける nicht は viel のみを否定し、auch ohne Störung にも erwacht にも何ら影響を及ぼさないという解釈の上に立脚している。従って nicht viel später は一種の成句のようなものとなり、既述の如く「晩かれ早かれ」「遠からず」「まもなく」「いずれそのうちに」か、それとも「それ以上もう（眠っていることは）できない」かのような訳になっている。どちらの解釈を採ろうとも、nicht は viel 一語のみを否定しているだけであり、後に続く auch ohne Störung erwacht は nicht が直前に現れていないが故に否定されていないものと解されているのである。

auch ohne Störung が nicht で否定されていないものと解すると、それを前提部にすることに何らの躊躇も必要あるまい。非現実話法文であるからには原則として前提部が存在する。それが auch ohne Störung であるというわけである。幸いなことに auch ohne Störung を前提部に解すると nicht viel später erwacht（「まもなく目を覚ます」或いは「もはや眠ってられない」）というように一見うまく繋がる。

或いは次のように解することができるかも知れない。此の非現実話法文は主文章のみで成立しているのであって前提部を考える必要などない。例えば：彼は非常に遅くならないうちに、たとえ物音に眠りを邪魔されることがなかりうときっと目を覚ましたことであろう。「非常に遅くならないうちに」を「晩かれ早かれ」「遠からず」「まもなく」「いずれそのうちに」「それ以上（眠っていることは）できない」と解し、日本語の語調を整えるために「たとえ物音に眠りを邪魔されることがなくても」を先に移動させれば、(11) の訳を除くすべての訳のようになってしまう。(11) の訳は「いずれそのうち、おのずと目覚めるはずだった」となっているが、既述の如く此の訳は前提部を考えない訳と断定しても差し支えあるまい。

話を戻そう。viel später と仮構すれば、それは主人公が auch ohne Störung

erwachenすることになる、と読者は思いかねない。もし読者がそのように仮構するとすれば、それは完全な誤りであり排除されなければならない。その「誤想排除」を原文ではEr wäre gewiß nicht viel später auch ohne Störung erwachtのように僅かに一つのnichtが行っていることを明らかにしてきた。それは一つのnichtでも関口氏の解釈に従えば理論的にはEr wäre gewiß nicht viel später nicht auch ohne Störung nicht erwachtと考えられることから説明できることを示した。

茲で取りあえず只今問題にしている非現実話法文を逐語的に訳してみよう。次のようになろう：

仮にもっとずっとずっと遅い時になれば彼はたとえ物音に邪魔されなくても目を覚ます、このように仮構するとすればそれはきつと誤った仮構であり排除しなければならないだろう。

此の逐語訳は何を云わんとしているのであろうか。此の逐語訳の「達意眼目」は何であらうか。『ファウスト』943行の場合と異なり、『変身』に於いては逐語訳だけでは「達意眼目」は残念ながら伝わってこない。

「達意眼目」をはっきりと伝えるためには如何なることが必要であらうか。そのためにはnichtがviel späterの直前に位置していることの意味を慎重に考えなくてはなるまい。繰り返し述べてきたが、nichtはviel späterと仮構することが誤りであると云っているのである。これはviel späterと仮構しない場合のことを考えよという合図であると考えなくてはなるまい。

viel späterと仮構しない場合には如何なることが生じるであらうか。それは関口氏に倣って理論的に考えられるとしたEr wäre gewiß nicht viel später nicht auch ohne Störung nicht erwachtからnicht auch ohne Störung及びnicht erwachtのnichtを取り去った事態が生じることになる、このように考えなくてはなるまい。具体的に言えば、仮にviel späterでない時を仮構すれば主人公はたとえ物音に邪魔されなくても目を覚ましたことであらうといった仮構の事態が生じることになる筈である。

viel späterと仮構しない場合とは如何なる場合であらうか。それは、もう既に主人公が目を覚ましたのと同じ時にさえ、ということである。単に目を覚ましたのと同じ時に、ということではない。これではnicht viel späterということにならない。これではうんとうんと遅い時を仮構することが誤りであるというこ

とにはならないのである。このことは特に強調しておかなければならない。

次のように訳すと関口氏の云う「達意眼目」はしっかりと伝わるであろう：

彼はきっともうその同じ時にさえたとえ物音に邪魔されることがなかりとうと目を覚ますことだってできたであろう。

Er wäre gewiß nicht viel später auch ohne Störung erwachtをこのように訳すと、それに続くdenn er fühlte sich genügend ausgeruht und ausgeschlafenへの繋がりがもうまくいくのではあるまいか。

denn er fühlte sich genügend ausgeruht und ausgeschlafenにはdoch schien es ihm, als hätte ihn ein flüchtiger Schritt und ein vorsichtiges Schließen der zum Vorzimmer führenden Tür gewecktが続く。後半の文の冒頭に位置するdochに就いて考えてみることにしよう。その前に関口氏のdochに就いての考察を、少し長いが紹介することにしよう。関口氏は『dochとは何ぞや?』の中でdochの本質を次のようなものと見なしている⁴：

大先生 「しかし」や「それにも拘らず」ではdochの本質は解りさうにもない。それらは寧ろ一つの特特殊な用法の場合であつて、私は「やつぱり」「やはり」といふ譯語から出立しないといけないと思ひますね。

小先生 なるほど、——してそれはどう云ふ意味で仰言るのですか？

大先生 勿論如何なる場合にも「やつぱり」が當てはまると云ふではありません。時には「どうも」に當ることがあり（これは辭書にも出てゐます）、時には「流石に」と云つた方が好いことがあります。けれども、要するに、ドイツ語をやる人が苦勞をする場合の過半部を一擧に解決する絶好の譯語としては、私はやつぱり「やつぱり」を推擧したいと思ふ。その方がハツキリします。では少し理窟を捏ねませう。「やつぱり」とは何ぞや。

小先生 やつぱりと云ふのは……やつぱり「やつぱり」ですな。

大先生 さうです。それは貴君が生れた時から日本語をやつてゐるお蔭で、やつぱりは、やつぱり「やつぱり」より云ひ方がないのです。けれども、假に此の「やつぱり」といふ一言不可説な現象をつかまへて、これを多少論理的に分解して見るとしたら、さてどう云ふ風に云つたものでせう。

⁴ 関口存男著『ドイツ語学講話』202-204頁

小先生 一寸云ひ様がありませんな。

大先生 そんな頭の働きでは駄目だ。——では一つ「やつぱり」といふ現象をホゴして見せませう。ついに三日前、雪が降りました。此の冬は、どうも雪が降らなかつたから、私は実は天文臺の人たちが雪を忘れてゐるのぢやないかと思つて、「雪はどうしました、雪は」と一言ハガキを書いてやつたら、それで思ひ出したのだからどうか、とにかく急にあはてて降り出した。その日、知人にでくわしたら、その男「やつぱり降りましたね」と云つて、にこつと笑つた。

「やつぱり」とは何ぞや？——「此の調子ではもう斷然降らないことに決心でもしてゐるのかと思つたら、實はさうでもなくて、『やつぱり』『降つた』——此の構造に注意を要します。「やつぱり」は、必ず「否定」から出立して「肯定」にかへります。

小先生 なるほど、否定から出立して肯定にかへる.....

大先生 「さすが」も同じです。さすがに降つた、とも云えませう？ Es hat doch geschneitです。doch（やつぱり、さすがに）は、必ず「さうでないかと思つたら」「さうでないと貴方は仰言るが」「さうでないと云ふ事に普通はなつてゐるが」「貴君は反對かも知れないが」と云つたやうな無言の否定的基礎が必ずその一歩手前に潜伏してゐるのです。

小先生 一歩手前に否定があると云ふと、例のnicht.....sondernといふ形式をすぐ考へますが、ではsondernとどう違ひますか？

大先生 定義をもつと嚴密に考へて下さい。否定から肯定に「移る」のではありませんよ。否定から肯定に「歸る」のです。もつと嚴密に云ふと、同じ事實に關する甲の規定を捨てて乙の規定を取る時はsondernです。同じ事實に關する否定的宣言を暗黙裡に認められたものと考へて、それを打ち消しつつ「元の肯定に歸る」のがdochです。歸るといふ以上は、本來は肯定であつたにちがひない。故に、極く細かく論理的に考へると、肯定から否定になりかけて、こんどまた改めて肯定に歸る時に「やつぱり」と云ふわけです。つまり三つの段階を驛とする二つの運動です。Es hat doch geschneitでもさうで、「やつぱり」なる現象の潜在的段階を順次に昇るとすれば、

【第一段階＝肯定】 元來雪は毎年降るとしたものである。（きまつた話）

【第二段階＝否定の動き】 ところが今年はひよつとすると降らずに終るのであるまいか？

【第三段階＝肯定への逆戻り】 いや、『やつぱり』降った。(『さすが』は冬だ)。

此の三つのMomente (考因、因子、要件) は、どれが一つ缺けてもいけないので、その各々が、時には或一種の型に限定されたり、或ひは前景に乗り出したり背景に引込んだりするに従ってdochの諸種の用法が生れて來ます。

関口氏のdoch論は非常に優れたものであり、筆者は繰り返し読んできている。但し『dochとは何ぞや?』は細心の注意を払って読む必要がある。関口氏はdochをわかりやすく説明するために最も極端なパターンを挙げているように思われるのである。即ち、関口氏は第二段階を「否定の動き」としているが、dochがすべて第二段階に於いて「否定の動き」になると限らないのではあるまいか。そうでないdochもたくさん見られると思われる。最も極端なパターンが最もわかりやすいから、関口氏は意図して第二段階におそらく「否定の動き」のパターンをもって来たのであろう。

『変身』のdochに戻ろう。此のdochも第二段階が「否定の動き」にはならないと思われる。主人公はやっと夕暮れ時になって気絶に似た重苦しい眠りから目を覚ました。此の出来事を知らせると作家は仮構の世界を創りだす。目覚めた夕暮れ時よりもずっとずっと遅い時になった場合を仮構するのである。そのような遅い時になれば主人公に何が生じるのかを読者に考えさせているのである。此処で初めて主人公が物音に邪魔されて目を覚ましたという出来事が間接的に明らかにされる。つまり夕暮れ時よりもずっとずっと遅い時になれば主人公はたとえ物音に邪魔されなくても目を覚ますのではないかという形で。そのような仮構の世界を読者は想像するかも知れない。しかしそれは誤想であり排除される。主人公は既にもうその同じ時にさえ、たとえ物音に邪魔されることがなくても目を覚ますことだってできたであろう。そして此の仮構の世界が成立しうる具体的な証拠を挙げる。主人公は充分に休み充分に眠ったと感じていたと。此の仮構の世界はまさしく仮構であるが故に単に道を逸れただけである。ひょっとして主人公は物音に邪魔されることなく目を覚ましたのではないかという「否定の動き」には決してなっていない。此処ではdochの第二段階は「道を外れる動き」「脱線の動き」といったものと捉えなくてはなるまい。

『変身』のdochは次のようなものと解することができよう：

[第一段階＝現実の出来事] 主人公は物音に邪魔されて目を覚ました。

[第二段階＝仮構の出来事に脱線する] 主人公は既にもうその同じ時にさえたえ物音に邪魔されなくても目を覚ますことだってできたであろう。

[第三段階＝現実の世界に連れ戻す] 脱線した話から元の話に戻り、主人公は物音に邪魔されて目を覚ました証拠を具体的に挙げる。

『変身』に於ける doch は、此の図式で示したように道を外れて読者を迷い入れた仮構の世界から現実の世界に連れ戻す働きをしているのである。そして読者を現実の世界に連れ戻すためには doch (副詞) は文の冒頭に位置するのが最もよい。このことによって読者を可能な限り早く現実の世界に連れ戻したいという作者の気持は満たされるのである。

此の doch が読者をできるだけ早く現実の世界に連れ戻す役割を担っているとすれば、それに如何なる訳を当てたらよいであろうか。『変身』の訳者13人は問題の doch に対して次のような訳語を当てている。即ち「しかし」(8人)、それでも(1人)、だが(1人)、ともあれ(1人)、訳語なし(2人)。これらの訳語は、たとえ考察の対象としている箇所が筆者とその解釈を異にしようとも相応しいものとは思われない。『doch とは何ぞや?』の中で関口氏は述べていた：「しかし」や「それにも拘らず」では doch の本質は解りさうにもない。それらは寧ろ一つの特異な用法の場合であつて、私は「やつぱり」「やはり」といふ譯語から出立しないといけな思ひますね。

関口氏の此の解釈は、今問題としている『変身』に於いても当てはまるものであろう。doch は仮構の世界から現実の世界へ、脱線した話を元来の話に戻す働きをしているのである。関口氏は doch に就いて、その意は eigentlich (元来) であるとも云っている⁵。doch が「元来」の話をする時に用いられるとすれば、

⁵ 関口存男著『獨逸語大講座』第六卷111頁

如何なる根拠から doch は「元来」の意になるのであろうか。その前提にはある事態が動かし難いものと思われてその気持が頭の中を占拠しているということがなければならない。このような前提が存在すると、もし話が横道に逸れると頭の中を占拠している「ある事態」に戻ろうとする力が必ず働く。戻ろうとする「ある事態」、それこそ戻ろうとするが故に「元来」のものとなる。

doch が「元来」の意であるのはこのようにも見る事ができるとすれば、関口氏が云う doch の「三段階」は次のように直すこともできるであろう：

[第一段階] ある事態が動かし難いものと思われてその気持が頭の中を占拠している。

[第二段階] ある事態から脱線する。

[第三段階] 動かし難いものとして頭の中を占拠している「ある事態」に立ち戻る。

それは「否定の動き」から「肯定への逆戻り」、「脱線の動き」から「元来への立ち戻り」と符合する。『dochとは何ぞや?』の中で権田氏の辞典から Kennst du mich nicht? Doch, doch. (おまへは僕は知らんのか? 知ってますとも、知ってますとも) という用例を挙げているが、此の doch も「元来」の意に他なるまい。更に既述の Mit Euch, Herr Doktor, zu spazieren / Ist ehrenvoll und ist Gewinn; / Doch würd' ich nicht allein mich her verlieren (*Faust 941-944*) の Doch は「元来一人ならばこんなところに迷い込んで来たりしません」と訳することが可能なほどに「元来」(又は「本来」)の意に他なるまい。そして今問題としている『変身』の doch も「元来」「本来」の話に戻すことを行っているのである。

ではかかる働きをする『変身』の doch に対して如何なる訳語を当てたらよいであろうか。『ファウスト』943行に於ける Doch のように「元来は」「本来は」と云う訳では意は全く通じない。多少説明的な訳になるのはやむを得まい。「話を現実に戻そう」「話を現実に戻せば」といったように訳すとわかるのではなかろうか。或いは短く「現実には」と訳すことも可能と思われる。本稿の冒頭に掲げたドイツ文は、例えば次のように訳したら如何であろうか：

夕暮れ時になってようやくグレゴールは気絶したような重苦しい眠りから

doch をこのように捉えると、心態詞としての doch はより理解しやすくなるのではなかろうか。次の例を見られたい：

Wie unvergleichlich sind doch des Kaisers neue Kleider!
[Andersen: *Des Kaisers neue Kleider*]

これは皇帝の新しい衣裳を見た観衆の一人が発する言葉である。「三段階」は次のように説明することができるであろう：

[第一段階] 皇帝の新しい衣裳を見た瞬間にその衣裳の素晴らしさに心を奪われてしまう。
[第二段階] どんなことがあろうとも、という考えが衣裳の素晴らしさに占拠されている筈の脳裏を一瞬かすめる。雑念が生じる。これは横道に逸れることに他ならない。
[第三段階] けれども横道から直ぐに本来のことに戻る。此の回り道によって皇帝の新しい衣裳が素晴らしいという気持は一層「絶対に」動かすことができなくなる。

目下のところ心態詞の doch は理論的には此のように説明することができると思う。もしそうならば wenn ich doch ein Vogel wäre, Wie hieß er doch gleich? Schweig doch といった doch も解決するのにそれほど困難は伴わないであろう。

ある事態から「脱線する」という第二段階は、場合によっては「どんなことがあろうとも」「何を云われようとも」といった程度に考えることもできるのではあるまいか。その脱線によって第三段階に於いては「絶対に」という言葉を入れることができるほどに気持は一層動かし難いものとなるであろう。

目を覚ました。彼はきっともうその同じ時にさえ、たとえ物音に邪魔されることがなかろうとも目を覚ますことだってできたであろう。十分に休み充分に眠ったと感じたからである。現実には、彼にはせかせかした足音と控えの間に通じるドアをそっと閉める音で目を覚まされたように思われたのである。

以上で本稿を終わることにしたい。最後に筆者は次のことを是非云っておきたい。問題になっているのは、主人公が物音に邪魔されて目を覚ましたと云うことだけなのである。夕暮れ時の同じ時に自然に目を覚ますこともできたであろうが、それはあくまで架空の話にすぎないと、作家は但し書きをしているのである。此の但し書きに惑わされてはいけない。従って大部分の訳者が考えているような、主人公は物音に邪魔されて目を覚ましたが、物音によらずともその後まもなくして目を覚ましたであろうと云ったようなことは問題となっていない。亦少数の訳者が考えているような、主人公は物音に邪魔されて目を覚ましたが、その時にはそれ以上眠ってはいられなかったなどということは云われていないのである。

(2010年1月12日提出)

参考文献

関口存男著『冠詞 不定冠詞篇』1976年 三修社

関口存男著『ドイツ語学講話』1979年 三修社

関口存男著『獨逸語大講座』第六卷 1931年 外国語研究社